

源氏物語 本文研究と古筆切研究のあわい

横 井 孝

『源氏物語』の本文研究にはすでにさまざまな方法が試みられている。古筆切との相性はどうかであろうか。實際上、写本の欠片としか思われていない、文字どおりの断簡の本文が、研究に資するとすれば、どのようなアプローチが考えられるだろうか。いまだ確立された方法があるわけではあるまい。ひとつひとつ手探りで検討してゆくしか、少なくともディレッタント Dilettante の稿者には手段がないように思われる。

一 阿部秋生の本文研究

阿部秋生博士——といえば、小学館から出版された旧版の日本古典文学全集、そして現在最も広範に使われている

とおぼしい新編日本古典文学全集、それぞれの本文校訂を担当したことは、周知のことであろう。さらに明治書院の校注古典叢書、『完本源氏物語』などのテキストも手がけている。小学館の両全集、あるいはそうしたテキスト類の校訂作業の過程で、おのずと本文にかかわるさまざまな問題が浮上してくるわけで、阿部はその間、かれこれ二〇篇を超える論稿を公にした。⁽¹⁾ それらを精選した単著『源氏物語の本文』があることも、斯界にはよく知られている。阿部が没して、二〇一八年の本年で二〇〇年、『本文』が上梓されてもはや三〇年を経ており、もはや最新の研究とはいえない。

しかし、にも拘わらず、そこに開示された阿部の見解はほぼ一貫しており、そのまま現在の本文研究のひとつの到

達点を示している、と見てよいように思える。

『源氏物語』の本文は、青表紙本・河内本共に『源氏物語』の原典そのままの本文とは考えられないこと、つまり校訂者がそれぞれに手を加えているらしいと考えられるものである、なまじ、その校訂の事情が伝えられているだけに、そういうことの全く知られていない他の作品の伝本の場合のように、多少崩れてはいいても、原典の本文の姿を残しているのではないかという夢を持つことができないということである。

〔伝本状況について〕^②

たとえば、等しく青表紙本とは称しても、奥入を有することによって定家の家の証本と考えられているものと、奥書によって青表紙証本と考えられているものとの間には、誤写・誤脱とみるだけでは処理しきれない本文の異同・対立が系統的にあるようだ。どうして一つの青表紙本がそんなことになるのか、殆ど、手のつけようもないかに見える難題である。

〔矛盾する本文〕^③

定家や親行が見た諸伝本には、古伝本系別本という名

を与えて一括することはできるが、その括られた伝本個々の本文は、普通の作品の伝本の本文のように、同系統の本文ではない。一つ一つの伝本がそれぞれ異なる本文をもっている。つまり、『源氏物語』という一つの原典の本文（表現）を原拠として尊重し、それを忠実・精確に書き写することを心がけて作業が重ねられてできた伝本群ではなかったのである。従って、そのような古伝本系別本諸本の中に、原典以来の本文（表現）の姿を保っている伝本が存在していたであろうか、たとえば、存在していたとしても、定家や親行がこれを見分ける術をもっていたであろうかと考えさせられる。

〔別本の本文〕^④

定家は、この一本一本がまちまちの本文をもっていた古伝本系別本諸本の中からある一本を選んで、それを家の証本としたと言われるのだが、どういう本文を選んだのであろうか。……本文以外に、原典に近いことを知りうる客観的徴証があるわけでもない。たとえば定家は『土左日記』を書写する時、貫之自筆本を採ったらしいが、『源氏物語』の場合は、そのような原著者自筆本を採ったわけでもない。とすると、定家は、その作家としての見識とでもいうものによって、これ

という一本を選んだと考えるより外にないのであるか。定家の作家的見識の高さは評価しうるとしても、結局それは定家の目であって、それを紫式部のそれに振りかえることはできない。

(同)

かつて、そしていまもそう信じている（あるいは、信じようとしている）研究者がいるように、「青表紙原本は、ある一本を忠実に書写したのだ」「定家が校訂をほどこしたのではないのだ」「だから青表紙本は原典に至近なのだ」、そして「九帖の明融本は定家本の臨模本であり、五三帖の大島本は定家本を受け継いだ本だ」、だからこそ、現存する大島本は青表紙原本たる定家本に遡源し、さらに平安期写本の「ある一本」をとおして紫式部の原典を透かし見ることができる——という夢が あった。しかし、阿部は、ここで「夢を持つことができない」「原典以来の本文（表現）の姿を保っている伝本が……存在していたとしても、定家や親行がこれを見分ける術をもっていたであろうか」「結局それは定家の目であって、それを紫式部のそれに振りかえることはできない」と、現在の本文の伝存状況を見据え、冷徹なまでの言辞の数々で一刀両断したのである。

現在でこそ「青表紙本」という用語をつかう研究者は少

なくなつたが、その契機をつくつたのが、阿部博士の「源氏物語の諸本分類の基準」（『国語と国文学』第五七巻第四号、一九八〇年四月）だったことは衆目の一致するところであろう。現存諸本を分類整理するにあたって、中世以降の文献に見える「青表紙本」「河内本」という呼称に依拠したのは、研究手順としてまちがいはなかったか、と池田亀鑑の『源氏物語』の諸本調査の基本理念に対して、根本的な疑問を呈したのである。それ以後、別の角度・方法から「青表紙本」を点検したり、現行の活字本の底本になっている大島本を再検討するなどの動向が生まれたこと、周知のとおりである。

しかしながら、阿部秋生という研究者は、池田亀鑑のように平安時代文学の作品について、諸本を渉猟したり、現存写本の本文・形態の調査など、いわゆる本文研究に主軸をおいて研究生活をまっとうしたひとではなかった。諸写本を渉猟し本文を安定してゆく作業——阿部のことばを借りれば「本文作り」——は、もとより阿部の専門とするところではなかった。『源氏物語研究序説』『源氏物語の物語論』『光源氏論』など博士の主要著書をならべてみても、「本文作り」を特化させた研究方法を採っていたわけではないことは一目瞭然であろう。

『源氏物語の本文』の「あとがき」に、このように記さ

れている。

十五、六年前、極く一般的読者のための本文を作ることにしたのが、『源氏物語』の本文を実際に扱うことになったはじめである。それまでも、本文研究はむずかしいものだと、話としては承知していたが、実際に手をつけてみると、開かずの扉とはこんなものかという思いがした。爾来、今日まであれこれやって来たが、解決のめどがついたという思いはまだない。五里霧中であることに変わりはない。

しかし、これは手を束ねて傍観していい問題ではない。誰かが解きほぐす努力をしなければならぬことだが、なまじな考えで手を出すと、解決どころか、却って問題を混乱させてしまうおそれがあるように思う。私は、本文研究を自分の仕事にする決心したこととはなかったが、せめて問題にどんなものがあるのかだけでも拾い出しておこうと思って書いたものが、ここに収めた論考である。これらは、いずれも、いくつかの条件を前提において、その前提に立つならばこのようなことを考えるのではないかという議論である。こうして、段々と論を詰めてみると、時には、前提条件をはずしても成立しそうなものが見えて来たか

に思われることもあったが、レンズ（作業方法）の解像力が不足なのか、操作が拙劣なのか、いまだに定かな像が結ばれたことはない。……（後略）……

（二二一—二二三頁）

稿者は、これまで阿部博士の驥尾に付して、その仕事を瞥見する機会があったが、旧稿^⑥でものべたとおり、右のような発言は、論文本体ではごくごく慎重な仕事ではありながら、同時に、いつも率直な（あるいは率直に読める）見解を表明するのを常としていた。「極く一般的読者のための本文を作ることになった」というのは小学館の日本古典文学全集（旧版）のことであることはいうまでもない。そして、請われたところや自らの問題意識によるものによって築かれたのが、右にふれた本文研究の論考の二〇篇余だつたというのである。その結果、「解決のめどがついたという思いはまだない」「いまだに定かな像が結ばれたことはない」という。もちろん、一書の「あとがき」という場での発言でもあり、謙辞でもあったろうが、右の一覧の諸論のほとんどは『大成』と『大成』以後』に対する疑義の提出であつたのだと思われる。

にもかかわらず、本稿冒頭に掲げたような阿部の『源氏物語』本文に対する見解が、三〇年も経過した現在まで「ひ

とつの到達点」を示しつつづけているのだろうか。阿部の指し示すところをきつかけとして、この物語の本文研究のおかれている現状、その問題点を、Dilettanteの目で見直してみようと思う。

二 本文研究の現実

本節も旧稿⁽⁷⁾にのべたことと重なる。『源氏物語』研究の場における本文への意識の希薄さについての不安を述べたものだったが、紙幅が限られていたため、踏み込みが十分でなかった。ここに稿をあらため、出直し再読したい。そのため、以下の内容はそれと行文上、まったく重なるところがある。意のあるところをお汲み取りいただき、ご寛恕願いたい。

*

二〇一四年十一月一日(土)、佛敎大学の二条キャンパス(京都市中京区西ノ京東梅尾町)で中古文学会関西部会主催のシンポジウムが開催された。題して「源氏物語本文研究の可能性」。

基調講演 陽明文庫・名和修氏「陽明文庫別本源氏物語について——その書誌的観点から」

を筆頭に、シンポジストとして、

岡嶋偉久子「鎌倉写本に見る様々な情報——主として河内本から」

加藤洋介「河内本・別本から見た定家本源氏物語」

新美哲彦「定家本『源氏物語』の諸問題——大島本と明融本の比較から見えるもの」

という当代の俊秀をならべ、しかも題目からわかるように、当時も現在も本文関係ではもっとも先鋭な話題ばかり。『源氏物語』だけではなかったが、中古文学会が二〇〇三年度秋季大会を同志社大学で開催した際、大会校・廣田収と陽明文庫長・名和修の両氏のほか関西部会の方々の計らいで、第三日目(一〇月一三日(月))に「陽明文庫見学」が挙行された際、見学者を六回も入れ替えるほどの盛況だったことを思えば、貴重きわまりない宝庫の話題には関心をもつ方が大勢いるはずだと思われた。

ところが、事前の打ち合わせが不十分だったせい、司会(不肖・横井がつとめた)の力量が足りなかったせいもあってか、やや盛り上がり方に欠けた。シンポジストの方々の発表も「先鋭な話題」であっただけに、行論の問題点や視点・方向性が各自にまかされていてすりあわせがなかったため、司会の技量のあまさも相まって議論が散漫になってしまった。いまだに慚愧の念を払拭できないでいる。しかも、題目と概要は事前に公表されていたにもかかわらず、

かなりの空席があったように記憶している。

このシンポジウムは、二〇〇八年六月七日（土）「源氏物語千年紀」の年に同じ中古文学会関西西部会が開催した「大島本源氏物語の再検討」の第二弾として企画されたものであろう。前回は時宜にかなっていただけいか、一般の関心も高く、会場の京都市文化博物館の旧館は満席の状態だった。大島本は古代学協会の所蔵であり、同博物館の目玉商品でもあったため、京都近辺の一般の方々も大島本は展覧会で目にしたことのある写本だったからでもあろうか、会場の選択も理に適ったものであった。

それにくらべて二〇一四年の場合はどうしたことだろう。非力な司会者は、シンポジストの繰り出す発表内容が河内本・別本・定家本と拡散してゆくのに対して、大島本の時のようなテーマの絞り込みができず、きりきり舞いさせられながら、しきりと既視感のような感慨にとらわれていた。

それは、先達もまた同様の体験をしていたということがあったからだ。⁽⁸⁾

一九九二年の中古文学会春季大会のことというから、さほど以前のことではない。先ごろ物故した野村精一が、大会初日に出席すると満席にちかかったという。翌日は早めに会場に赴いたところ、午後の研究発表のころには空席が

目立つ状態であったとのこと。そこには本文研究の発表がプログラムとして並んでいたからなのであって、野村はこう慨嘆してみせた。「本文研究のところ、聴衆が減ったということの意味は、考え直してみると、いささかおそろしいことではないのか」——と。

この、本文研究の人気のなさという現実直面して、野村は、研究者の間に「さまざまな活字本、注釈、翻刻、そしてそれを補う影印本、複製本、手もとに置ける紙焼本、マイクロコピー等々、あらゆる資料が、既にととのえられ、それさえよめばあらゆる研究が可能だ、という幻想」（傍点野村）があることを指摘し、

この幻想者たちがむしろ多数派であることを明示しており、それを善意の過信とみなすにせよ、せいぜいこれら多数派は、非幻視者たちの、その研究成果をまっぴら、わびていのだ、ということになるのか。とすれば、この「幻想」をいくつか持たぬ人々の責任は、より重かつ大なるものがあるはずだ。目下のところ、せいぜい定家校訂本の源氏物語（悪くすれば故池田博士校訂本）をもって、平安期のそれとみなして、せつせと源氏物語論や紫式部論を生産しているその現状に対する責任である。それが多数であればあるほど、その少数

者たちの責任は、重くなるはずである。……いつてみれば、未成年者に対する保護者の社会的責任に近いものかもしれない。

という。皮肉というスパイスが効きすぎているけれども、言わんとするところは明白であらう。この「未成年者」たちへ辛辣な訓誡である。野村のこの発言以後も、陽明文庫の典籍を大がかりな展覧会でなく学会会員限定で、まのあたりにできる機会を、あえて無視できる一団の存在があった、ということなのだ。

さらに野村は、「しからば、その少数派はどこにいるのか。源氏についていえば、本文研究を専業としている向きは、はたしてだれか？」と迫る。いうまでもなく、ここからが野村の評論の入り口なのである。

ここでいささか非礼な言辞を弄させて頂ければ、『源氏物語の本文』の著者も、『源氏物語の文献学的研究序説』の著者も、それをもって自ら任じておられぬように拝察する。そういう思いでみてみると、いまいささかことにかかずらわっている故山岸博士の旧蔵書を調べてみると、同博士の研究の総体の中では、源氏物語の本文研究など一局部にすぎない、という印象を受

けることも確かである。

この一節については、稿者もまた同感の思いを禁じえない。阿部秋生の場合については、前節にすでにその言説を引用しておいた。山岸徳平博士の場合、戦前・戦後まもなくのころには、資料そのものは手にすることができても、写本の本文自体が錯雑して、みずから校訂をほどこさねば読み取れぬものが多かった。本文の校訂をするためには、眼前の本を離れて諸本を見なければならぬ。そうして、山岸文庫には諸方の現写本が残されたのであり、それには過眼の証として、ほとんどに校訂の朱筆が加えられている。^⑧

野村は、こうした実例をもとに、

……源氏物語の本文研究の専門家なるものの存在もまた「幻想」そのものだったのかもしれない。古来そんなひととは一人も存在しなかったのだ。真の源氏物語の研究者たちは、必要に応じて自らその本文研究に従事したのである。右の阿部・池田両先覚しかり、さかのほれば玉の小櫛四の巻を見ればよい。結果は惨憺たるものだったにせよ、そこで宣長が湖月抄の本文対手に、いかに四苦八苦しているか。おそらくこれなくして、

中世源氏学批判ももの、あはれ論も自立しえぬかにまで執していることは、一読直ちに知られよう。……裏を返せば、真の源氏物語研究とは、この本文研究を必然的に伴うものなのであって、それを他者に依存して、どこかに本文（善本）提供者がいるというかの幻想の持主たちの研究が、真の源氏物語研究などになりようはずがない、という苦い真実を逆証していることとなるのではあるまいか。

という。こうして野村は、先人たちが「必要に応じて自らその本文研究に従事した」に過ぎず、「真の源氏物語研究とは、この本文研究を必然的に伴うものなのであって、それを他者に依存することの不毛を指弾したのである。野村のいうところの「幻想」の持ち主が「せっせと源氏物語論や紫式部論を生産している」現状のうそ寒さ——と。

野村は、この多数派を「未成年者」呼ばわりしながらも、だからこそ、というべきか、「非幻視者たちの、その研究成果をまちわびている」と評するが、これとても少しく好意的に見すぎていやしまいか。三次産業の従事者が一次産業の人たちを見る、あるいは臨床医学が基礎医学を下に見るといった都市伝説めいた譬え話ではどうだろうか。比喩が間違っている、言葉が過ぎる、ということであれば撤回

するにやぶさかではない。が、自分たちの研究を本文研究などよりさらに高次のそれだという思いが、「本文研究のところ、聴衆が減」る要因なのではなからうか、と私などは邪推するのである。

野村精一が右の評論を掲載したのは一九九二年。それから四分の一世紀を経た二〇一八年の現在、野村の指摘した段階よりも事態はさらに深刻化している。『源氏物語』研究の多数派の人々は小学館の新編日本古典文学全集からほとんど一歩も出ない有様。「……新編全集によった」とか「……新編全集により、表記を改めた」とかいう注記を免罪符にしているのではなからうか。大島本が一写本としてシンポジウムの熱い議論の俎上にのぼったのは、はるか過去に思えるような状況なのだ。中古文学の研究といえどもこれも源氏物語という状況を「源氏帝国主義」と称する向きがかつてあったが、その伝でいえば、今はまさに「新編全集帝国主義者」の時代なのではないか。

もつとも、誰もが諸方面の機関に納められている写本等に簡単にふれることができるわけではない、『源氏物語』のような膨大な詞章量を誇る作品の本文を、皆が皆、一から調査・校合・整定の手続きをとるわけにもゆかない、という反論があることは十分に考えられる。現に、工藤重矩のいうように、

……執筆者個人が自ら一本を選ぶとなれば、選定と校訂だけで一生が終わる。

研究を支える環境。個々人の興味。得手不得手。一生の限られた時間。何もかもはできない。単純な理屈である⁽¹⁰⁾。

まさしくそのとおり。反駁の余地もない。しかし、物語の表現をあげつらうものであれば、工藤自身が右の後文にいうごとく、「注釈書の底本および本文整定のあり様への留意は必要なことだから、それへの対応をしておいた方がよいのも事実」である。研究者である以上、「……新編全集によった」「……新編全集により、(自分好みに)表記を改めた」のレベルで済ませてよいのか、ということなのである。さらに工藤が言葉を継いで、「本文について遠慮せずに発言すべきなのだ」という。これまた、まさしくそのとおり。もちろん「遠慮せずに発言」するからには、それなりの用意が必要なことはいうまでもなからうが。

三 本文研究としての古筆切研究

「多数派」は措くとして、しからば、「少数派」「非幻視者」たる者が「幻想」であり実際には存在しないとしても、そ

うあるとする者、そうありたいと思う者たちはどうか。

野村精一のいうように、「源氏物語の本文研究の専門家なるものの存在もまた『幻想』そのもの」だとしても、より多くの機会に本文について「遠慮せずに」発言する研究者があることもまた事実である。そのひとたちによって、新編日本古典文学全集の底本のおおもとである大島本再検討の機運が一時高まったことがあった。前節に言及した二〇〇八年の中古文学会関西西部会主催のシンポジウム「大島本源氏物語の再検討」が、その象徴的な事件であった。同部会の編集による『大島本源氏物語の再検討』(和泉書院、二〇〇九年一〇月刊)も上梓された。

二〇〇八年は「源氏物語千年紀」のイベントにあわせるかのように、『源氏物語』古写本の発見が相次いで、斯界の話題としては珍しく、賑々しく各メディアで報道されたのである。三月に角屋本(別本)、七月に飯島本(別本)、八月に大沢本(別本)というぐあいに。その数年前、一九九九年に文化庁が購入した平瀬本、二〇〇一年には大正大学本が公表されはしたが、さほどの話題にならなかったのと対照的ではあった⁽¹¹⁾。

しかし、こうしたマスメディアを通じての話題というのは、一過性で終始することがすくなくないことは世間の常識であり、斯界もまた研究者たちの関心が同様に引き潮に

なっただかに見える。大島本をめぐる議論は、その淵源と見なされている定家本に転位し、それについての発言も途絶えたわけではないけれども、二〇一四年のシンポジウムが象徴するごとく、テーマの絞り込みができず、相対化されて見えてしまうという現状がありはしまいか、と危惧するのである。

一揃えの古写本の発見は、それなりに重い出来事で衝撃的ではあるのだが、それすらも一過性の出来事として世間では消費されてしまう。古写本といえども、所詮は紫式部の原本ならざる一写本に過ぎず、しかも五四帖をかかえる『源氏物語』の常として、取り合わせ本でしかなからう。とすれば、何年に一度、何十年に一度の僥倖を期待して、日本中・世界中を探索してまわるのは、あまりにも非効率であり、非生産的である。

これまで私たちが素材にしてきたテキストは、大島本にせよ三条西家本にせよ室町期の写本が主体であることを鑑みれば、冊子の古写本と同等に鎌倉期なりの価値を有するもの、室町期のそれを相対化しうるもの、といえ、古筆切のほかには考えられないのではなからうか。

一首だけでも鑑賞可能な和歌とちがって、物語などの散文は、ある程度の本文の量がなければ作品として享受する

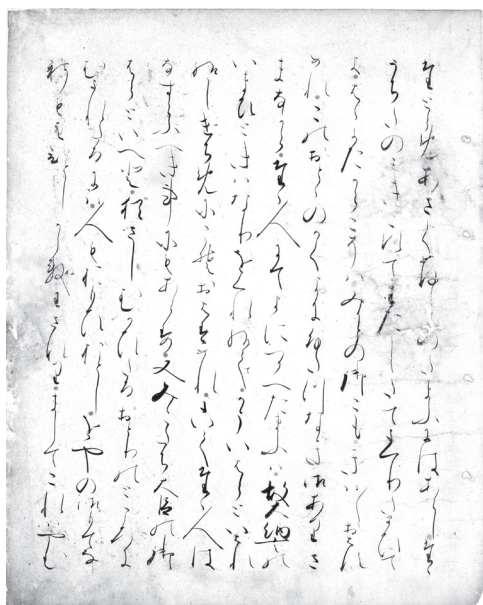
方法がない。われわれの業界の「研究」という営為も、享受の方法の一端であるとするれば、まったく同様な事情にある。

藤井隆・田中登の先駆的研究によって、古筆切の存在が市民権をえた今日にあっても、『源氏物語』のような質量の膨大な作品は、片々たる本文の断片に古筆切を検討するに値する対象としてまともに扱おうとする研究者の数はまだまだ稀少、「少数派」のなかの「少数派」としかいいようがない。古写本が市場に出たとしても、鎌倉期の『源氏物語』写本であれば、一揃い五四帖で三億二〇〇〇万円の値づけされたものを見つけたこともあるし、たった一帖でも六五〇万円などというのものもあった。それに比べて古筆切は、高価になったとはいえ、物語切などは貧書生でもかろうじて手の届く価格帯であり、一枚二枚と所蔵している研究者も少なくない。また、右記したごとく片々たる形態であるために、どうしても趣味的な対象として見られがちであった（あるいは、現在も）。

しかし、その断簡も、ひととおりの収集作業を経て、ツレを集積してみたとしら、どうだろうか。

たとえば、藤原為家（一一九八―一二七五）を伝称筆者とする大四半切『源氏物語』（図版1）。

所掲の図版は、縦三二・九cm、横二六・三cmという大型本



〔図版1〕伝為家筆大四半切薄雲の巻(実践女子大学蔵)

の断簡で、ツレの多くはもと大和綴であった痕跡の孔が四つのこされているのが特徴。軸装されたものの、未表装のもの、形態はさまざまだが、もとの本の形がそのまま保存されている貴重な資料である。

内容は河内本の本文であり、その大型本である形態と書写年代からも、河内本の代表的本文とされる尾州家本と比較されることが多い。尾州家本は、おおむね縦三二・〇cm、横二五・五cmであり、本断簡の寸法とほぼ同じく、やはり大和綴である。尾州家本がさまざまな修正・改訂の書き入

れなどを経て「河内本」の本文になっているのに対して、一連の断簡は、修正・改訂の手が加えられない、純粹な「河内本」の本文なのである。尾州家本よりもこの断簡群にこそ注目すべきだ、より古さを感じるという指摘がある⁽¹²⁾。

当該断簡のツレとして、花宴・賢木・真木柱・薄雲・竹河などの諸巻の本文が残されており、薄雲の巻だけでも、一九葉の存在が確認されている。その一覧を次に表示しておこう(表一)。

古筆切研究の要諦のひとつに、とにかく「ツレを探す」ということがあった⁽¹³⁾。この残存状況をみるかぎりでも、まだ発見されることが期待できるように思われる。現に、昨年二〇一七年に本学が購入した古筆手鑑『筆陣』には、ツレの賢木の巻断簡が押されているのを発見した。しかし、現在知られるものだけでも薄雲の巻全体のほぼ三割二分程度であり、しかも隣接した本文を繋ぐことができ、初期段階の河内本の相当な部分が現存することになる。

端倪すべからざるは、古筆切による本文研究である。別の例を次にみてみよう。

四 伝寂蓮筆六半切若紫の巻

ここに、寂蓮を伝称筆者とする、一蓮の古筆切がある。

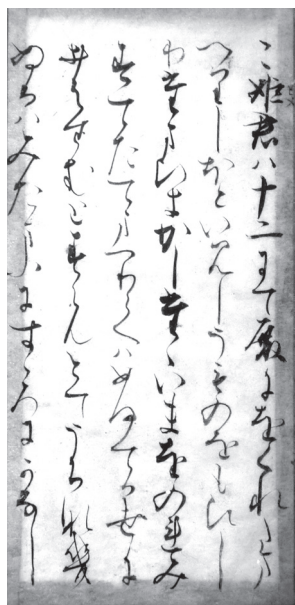
〔表一〕伝為家筆大四半河内本『源氏物語』薄雲の巻切一覧

	当該断簡の『源氏物語大成』本文相当頁行数(冒頭～末尾)	所在・掲載文献等
1	六〇四頁10行目「たとらめあ」～六〇五頁3行目「これはやむ」	実践女子大学図書館
2	六〇五頁3行目「事なき御か」～六〇五頁9行目「とをしさに」	実践女子大学図書館
3	六〇五頁9行目「しるてもえ」～六〇六頁2行目「なき事さへ」	国文学研究資料館
4	六〇七頁8行目「とめてたく」～六〇七頁14行目「かれいつか」	個人蔵
5	六〇八頁7行目「よりはなや」～六〇八頁13行目「こえたまふ」	実践女子大学文芸資料研究所
6	六〇八頁13行目「やまさとの」～六〇九頁5行目「れにたり又」	国文学研究資料館
7	六〇九頁12行目「人めのとよ」～六一〇頁3行目「うつくしき」	『平成新修古筆資料集』
8	六一〇頁5行目「にまいりつ」～六一〇頁10行目「なとやうに」	鶴見大学
9	六一一頁3行目「くしものさ」～六一一頁10行目「かけて中将」	個人蔵
10	六一五頁13行目「おほししら」～六一六頁6行目「きりさふら」	実践女子大学文芸資料研究所
11	六一六頁6行目「ひてこまか」～六一六頁12行目「もほのく」	実践女子大学文芸資料研究所
12	六一六頁12行目「きこゆるに」～六一七頁5行目「ん事ものこ」	実践女子大学文芸資料研究所
13	六一八頁5行目「はのこすゑ」～六一八頁12行目「もおもき所」	国文学研究資料館
14	六一九頁11行目「かく心にこ」～六二〇頁4行目「はへるなり」	実践女子大学文芸資料研究所
15	六二〇頁4行目「若君はらま」～六二〇頁11行目「すゝみそう」	実践女子大学文芸資料研究所
16	六二四頁9行目「みかとはあ」～六二五頁1行目「るところに」	『筑波書店古書目録』八三号
17	六二五頁1行目「うつりてさ」～六二五頁8行目「もてかしつ」	実践女子大学文芸資料研究所
18	六二八頁1行目「うちゆきか」～六二八頁7行目「ちなるとも」	『古筆学大成』二三卷
19	六二九頁14行目「まさりため」～六三〇頁7行目「なによせて」	国文学研究資料館

寂蓮（一一三九～一二〇二）は、いうまでもなく、『新古今集』の撰者にして、藤原俊成の養子となった歌人。三夕の歌「さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮」で知られる。その人を伝称筆者としてもつものに、『新撰古筆名葉集』には『古今集』の右衛門切、『和漢朗詠集』の大坂切を見出すが、物語類の名は見えない。ただし、国宝『寝覚物語絵巻詞書』、京都・観音寺蔵古筆手鑑の『源氏釈』切などの筆者に擬せられてもいる。

『源氏物語』断簡として知られるものに『古筆学大成』第二四巻におさめる明石の巻切があるが、一連の若紫の巻の切とは別種の古筆切である。むしろ『大成』同巻の伝小大君筆の若紫切こそが、一連の寂蓮切とツレであるかと思われる。

まず、次の〔図版2〕がその一葉。



〔図版2〕

こ姫君は十二にて殿にをくれたま
へりしほといみしうものをもひし
りたまひきかした、いまをのれみ
すてたてまつりては如何てか世に
おはせむとすらんとてうちなき
ぬるはみたまふにすゝろにかなし

1
2
3
4
5
6

光源氏が、まだそれと知らぬまま紫の君をのぞき見するなか、尼君が紫の君の黒髪的美しさを愛でながら、その母の思い出語りをする。『源氏物語大成』一五七頁⑩～⑬行に相当する場面だが、『大成』を見ても細かな異同がはげしい箇所と読み取れる。

以下、校異のおもなものを示した。パーレン内の数字は断簡の行数、諸本の略号は『大成』に準拠した。

①十二にて（1）

- a 十二にて——明・公・柿・肖・証・三・湖
- b 十二。にて——池
- c 十二はかりにて——〔国〕
- d 十はかりにて——幽
- e とをはかりにてそ——〔河〕
- f 十はかりにてそ——〔陽〕
- g 十にてそ——〔中〕

h とをはかりにて——〔麦・阿〕

②殿に（1）

a 殿に——御・大・横・柿・池・肖・三・幽・〔麦・阿〕

b とのに——公

c とのには——（河）

③たまへりしほと（1）

a 給ひしほと——御・大・横・柿・池・肖・三

b 給しほと——明・公・幽

c 給へりしかと——（河）〔別〕

④もの（2）

a 物は——公・幽・御・柿・〔中・麦・阿〕

b ものは——明・大・横・池・肖・三〔陽〕

c もの——（河）

⑤たまひきかし（3）

a 給へりしそかし——明・大

b 給へりしそかし——御・横

c 給へりきかし——柿・〔麦・阿〕

d 給へりしかし——池・三

e 給へりき——（河）

f 給しそかし——公・幽

⑥みすてたてまつりては（3）

a みすてたてまつらは——定・明・公・幽

b みすてたてまつりては——（河）

c 見すて奉ては——〔麦・阿〕

⑦うちなきぬるは（5）

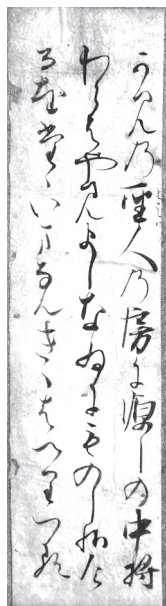
a いみしくなくを——公・大・池・肖・三

b いみしうなくを——明・横・幽

c いみしふなくを——〔陽〕

①②は定家本系と河内本・別本が対立するところではあるが、④⑥⑦は断簡と河内本の共通点が見出せる。

次の断簡〔図版3〕は、〔図版2〕の二、三頁ほど後、光源氏がのぞき見をする僧坊に僧都が現れ、源氏が瘡病を療



〔図版3〕

養に來ていることを告げる場面である。『源氏物語大成』
一五八頁⑤～⑥行に相当する。

かみの聖人の房に源しの中將
わらはやみましなるにものし給け
るをたゝいまなんきゝはへりつる
3 2 1

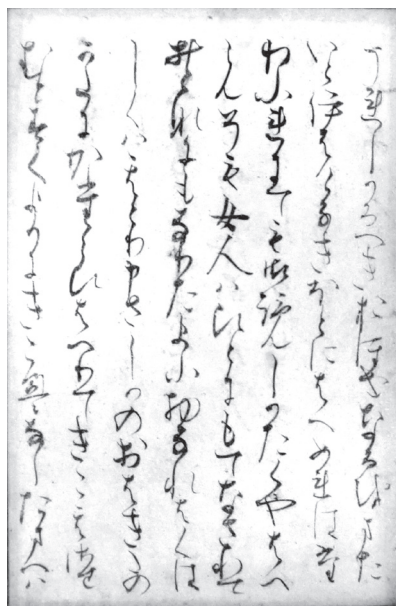
たった三行ではあるが、この短い本文にも異同が見出せる。1行目「源しの中將」は河内本系と肖柏本が一致し、定家本系の多く、大島本・横山本・池田本・三条西家本が「源氏の中將の」とする。3行目「きゝはへりつる」も河内本の「きゝ侍つる」としているのに対して、定家本系諸本は「きゝつけ侍る」としている。

〔図版4〕は、源氏が紫の君の素性を知り、その後見を申し出、僧都がそれに応える場面。

うれしかるへきおほせなるをまた
いといはけなきほとにはへめれはた
わふれにても御覽しかたくやはへ
らんそも女人はひとにもてなされて
おとなにもなりたまふ物なれはくは
しくはえとり申さしかのおはきたの
6 5 4 3 2 1

かたにかたらひはへりてきこえさせ
むとすくよかにきこえなしたまへは
8 7

『源氏物語大成』一六二頁④～⑦行に相当する場面で、こ
こでも定家本に対する異同が多く見出せる。



〔図版4〕

1行目「おほせ」は河内本と一致し、定家本・別本は「おほせこと」。2行目「いと」も河内本と一致し、定家本・別本は「むけに」。3行目「はへらん」は河内本と別本の麦生本・阿里莫本と一致し、定家本にナシ。4行目「そも女人は」は河内本と同じく、定家本・別本は「そもく女は」、5行目「とり申さし」も河内本と別本の陽明文庫本・麦生

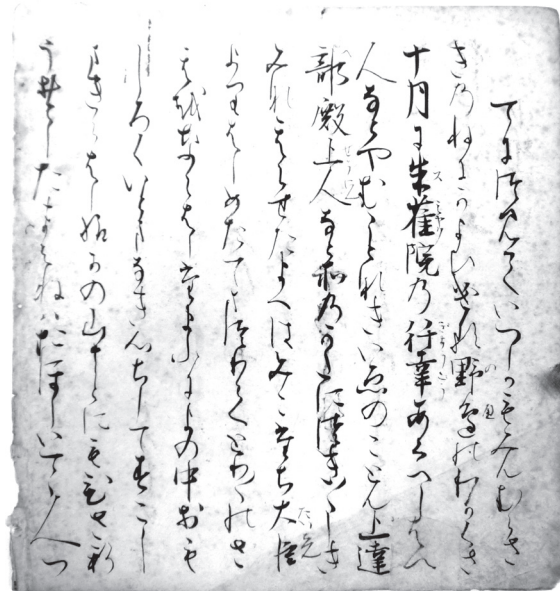
本と同じく、定家本は「とり申さず」。6行目「おはきたのかた」は河内本と別本の陽明文庫本・中山本と同じく、定家本と別本の一部は「をは」のみ。8行目「きこえなしたまへは」は河内本と別本の陽明本・中山本「きこえなしたま(給)へは」、定家本の多く(大・御・横・柿・肖・三)が「いひてものこわきさまし給へは」、池田本「いひて……したまへ・は」。

これらとともに若紫の巻の近接した箇所であり、ほぼ河内本に一致すること、筆蹟の特徴、「図版2」の寸法が縦一六・五cm(横七・八cm)、「図版3」が縦一六・五cm(横四・一cm)で、これまたほぼ一致し、ツレであることまちがいない。

続いて「図版5」。『大成』一七二頁⑦⑫行相当の場面。田中登編『平成新修古筆資料集』第四輯所掲の断簡である⁽⁴⁾。同書から解説の一部を引いておこう。

縦一六・現写本奥三センチ、横一四・四センチの一面十一行詰。場面は若紫巻の帰京した源氏から北山の若紫に歌を贈るくだり。……一行目の「これはまた」は定家本「また」で、断簡は河内本の諸系統と別本の一部と一致。二行目の「つ、けはへらさめれは」は定家本「はかくしく(う)つ、けはへらさめれは」とあつ

て、断簡は河内本諸本と一致……七行目の「いとくちをしくて」の「いと」があるのは、やはり河内本の諸本と一部の別本だけ、といった次第で、以下は省略するが、総じて断簡は河内本系統に属すると見て差し支えなからう。



〔図版 5〕

なくなむこれはまたなにはつをたに
つ、けはへらさめれはかひなくなむ

さても

あらしふくをのへのさくらちらぬ
まをこゝろとめけるほとのはかなさいと
うしろめたくもとあり僧都そうずの御返事
もおなしさまなれはいとくちをしくて
二三日ありてこれみつをそつかはす
少納言せうなごんのめのと、いふ人あるへしそれ
にたつねあひてありさまよくかた
らへなといひしらせたまふさもかゝら

伝寂蓮筆若紫の巻のツレとして、いま図版は掲げられな
いが、ほかに『古典籍と古筆切―鶴見大学蔵貴重書展解
説図録』⁽¹⁶⁾に二葉が収められており、

(I)とにてさすかにはかゝしく人の御け
しきありさまもおほしゝるへくも
あらずすなからなる御ほとにてあ
またものしたまふなるなかのあなつ
らはしさにてやましらはせたまは
むとすきたまひぬるもよと、もにお
ほしなけきつるを心くるしきことお
ほくはへるにかくかたしけなきなけ

の御ことのはをのちのこともととる
ましくたゝいとうれしきことに思給
へられぬへきをりにはへりなから(一八二頁①)⑥

(II) あしわかのうらにみるめはかたくと

もこはたちなからかへるなみかは
めさましからむとのたまへはけにこ
そかしこけれとて

よるなみのこ(ゝ)ろもしらてわか

浦うらにたまもなひかむほとそうきたる

わりなきことゝきこゆるさまのなれ

たるそすこしつみゆるされたるな

そこひさらむとうちすしたまへる

をわかき人ゝはみにしみてめてたし

とおもひきこえたりひめ君うへを

(一八二頁①)一八二頁①

と、ごく近接した箇所箇所の断簡が示されている。同図録の解
説によれば、「斐紙。縦一六・五、横一五・二糎。……(注
―(II)の断簡に) 飯島春敬墨書メモ『寂蓮法師筆／源氏物
語若紫／文化二二年初夏仲旬 古筆了意極春敬〔印〕』と
見える」とある。

さらに、国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇一五年三月刊）にも、極めのないものながら、まさしく一連の断簡のツレである一葉がおさめられている。ここでは同書から引用しておこう。

こひきこえたまひてなきふした
まへるに御あそひかたきのことも
なをしすかたなる人おはす宮の
おはしますなめりときこゆれば
をきて少納言になをしきたりつ
らむはいつら宮のおはするかとて
よりおはするこゑいとらうたけなり
宮にはあらねとおほしすつへき人
にもあらずこちのたまふをはつか
しかりし人そとさすかにき、な
してあしういひてけりとおほして

これも解説によれば、「一六・五×一五・二cm……雲母引き斐楮交漉紙」という。特に縦の寸法が一致しているところに着目したい。

またさらに、前に言及した『古筆学大成』所収「伝小大君筆 源氏物語切」を翻読してみると、これも若紫の巻の

一節で、次のようなものであった。

いとなれかほに御帳^丁のうちにかき
いたきていりたまひぬいとおもひの
ほかにあやしくもとあきれて
たれくもゐたりめのとはうしろめ
たうわりなしとおもへとあらましう
きこえさはかむもなかくなれはう
ちなけきつ、よりゐたり君はいと
をそろしうわな、かれていとうつく
しきはたつきをそ、ろさむけにお
もほしけるもらうたくてわか御心に
もうたておほさるればひとへはかりは

源氏が「六条京極のわたり」の紫の君の邸をおとずれ、一夜を明かす場面、『源氏物語大成』一八三頁⑥～⑩行に相当するところである。

いま我々の手もとは八葉の古筆切があり、計七二行、一〇九四字の本文を有していることになる。これは若紫一巻の六％ほどの分量でしかないが、たった三行の本文でも、『図版3』のようにおおきな異同をかかえる本文が鎌倉期に遊弋していたことを示す、重要な本文資料となりおおせ

ているのではないか。

こうした古筆切の集積という作業が、室町期の本文に泥んでいる現状に、幾分かの警鐘を鳴らしている、と読めな
いだろうか。

五 伝寂蓮筆本の存在

前節でみた古筆切からの知見をまとめてみよう。

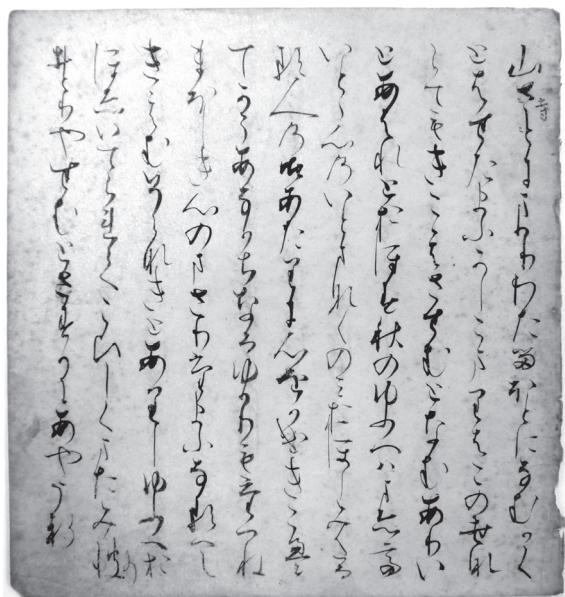
- (1) 〔図版2〕の切から『古筆学大成』小大君切に至るまで、若紫の巻の前半から後半に散在しており、もとは六半の冊子本であった。
- (2) 一巻の前半から後半まで散在しているところから、一帖一筆であった。
- (3) 本文は、おおむね河内本と一致するが、〔図版2〕の校異に示されたごとく、必ずしも河内本と全く同一ではない。

ほかの巻にツレが発見されなければ、当然、

- (4) もとの六半本が、若紫の巻一帖だけであったのか、五四帖揃い本であったのかは、今のところ不明。
- という項目を追加しなければならない。

本稿を準備していた昨秋、新たな知見が加えられた。

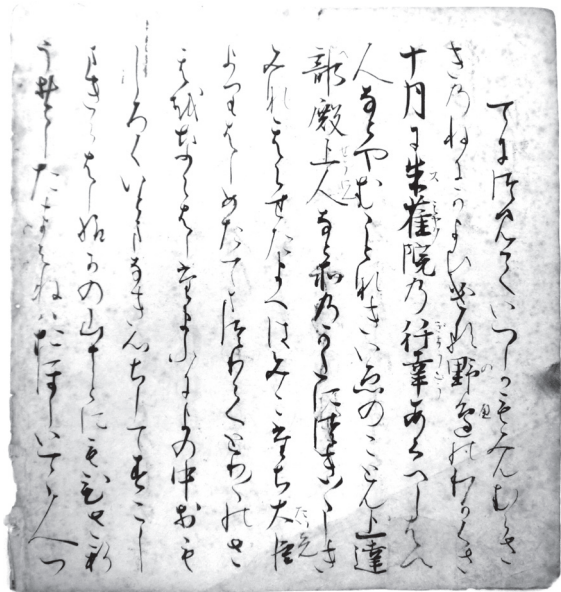
それがこの〔図版6〕〔図版7〕の断簡である。



〔図版6〕筆者不明六半切若紫の巻（表）（実践女子大学蔵）

写真ではわかりにくいですが、一枚の表裏、つまりもともと列帖装だった冊子本の一枚を切り取ったもの。化粧裁ちもほとんどされていないと思われるので、もとの冊子本の姿を残存させた形態だと推考される、貴重な本文資料である。

寸法は、縦一六・五cm、横一五・四cm。かなり鮮明に雲英が紙の表面に残っている。字高一五・〇cmほど。一面一行書き。料紙の端に綴じ穴の痕跡がある。



【図版 7】筆者不明六半切若紫の巻（裏）（実践女子大学蔵）

極札はないが、この筆蹟と形状から、一連の若紫の巻の断簡のツレであることはまちがいないと思う。

【図版 6】

山さ^寺とにまかりわたるほとになむかく
とはせたまふかしこまりはこの世な
らてもきこえさせむとなむありい

とあはれとおほすあきのゆふへはまして
いと、心のいとまなくのみおほしみたる
る人の御あたりを心をかけきこえ
てかうあなかななるゆかりもたつね
まほしき心のまさりたまふなるへし
きこえむそらなきとありしゆふへお
ほしいてられてこひしくまたみ
るとりやせむとさすかにあやうし

【図版 7】

てにつみていつしかもみんなむらさ
きのねにかよひける野^の辺のわかくさ
十月に朱雀^{スズク}院の行幸^{ぎょうこう}あるへしはへ
人なとやむことなきいゑのことん（も）
部^へ殿上人^{せうにん}なとそのかたにつき／＼しき
みなえらせたまへはみこたち大臣^{たいしん}
よりはしめたてまつりてとり／＼のさ
えをならはしたまふによの中おも
しろくいとまなき心ちしてすこし
まきはし給かの山さ^寺にもひさし
うおとしたまはぬはおほしいて、人つ

若紫の巻後半、『源氏物語大成』一七九頁⑩行～一八〇頁⑤行に相当する箇所、紫の君邸をおとずれた後、源氏が尼君に消息を送る場面にひきつづき、桐壺帝の朱雀院行幸が準備されるうち、尼君が亡くなる直前までの記事が図版に示されている。

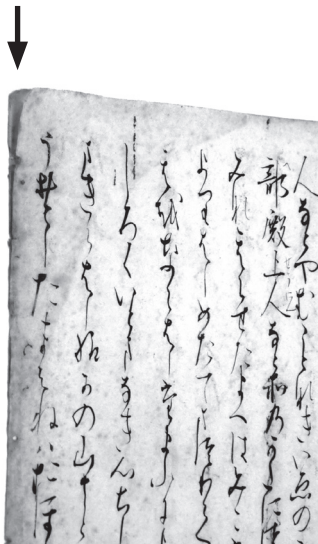
〔図版7〕の3行目末尾「はへ（人）」とあるのは、諸本「まひ人」とあり、「万ひ」の字形が訛伝されたものかと思われる。また、5行目「（なと）そのかたにつ（き）」とある下に薄く文字が読めるが、いったん「やむこと那」と書いたのを擦り消して、上から文字を書き改めたもの。前行に「やむこと那」とあり、かつ両方とも直前に「……なと」とあるので、目移りで書いてしまったものであろう。生々しい本文の様相である。

なお、まだ公表されたものではないので、ここでは詳細を述べるのは差し控えたいが、『源氏物語大成』一八五頁に相当する、個人蔵の、伝寂蓮筆断簡の存在がある。いま、この表裏の断簡と個人蔵を加えて、われわれはさらに三三行、五二一字の本文を得たことになる。

それとともに、〔図版6〕〔図版7〕の断簡によって、ほとんど化粧裁ちされていない、列帖装の原形が推定可能になるといふ収穫をもたらしてくれている。つまり、鎌倉期

に伝寂蓮筆『源氏物語』若紫の巻、六半本一帖がかつて存在したことは、これで否定できないであろう。本節のはじめに記したように、おなじ筆蹟・おなじ体裁の他の巻の断簡が判明していないため、もとの六半本が、若紫の巻一帖だけであったのか、五四帖揃い本であったのかは、今のところ不明としかいいようがないが、『源氏物語』がその伝流の過程で、単独に一帖だけ、あるいは数帖だけ書写されることままとったことは、藤原定家『明月記』、三条西実隆『実隆公記』などに傍証があまたあった。伝寂蓮筆本としても『源氏物語』の一本であったのだ。

ちなみに、次の〔図版8〕のように、当該断簡には表裏二枚に矧がそうとした形跡がある。古筆切の世界ではまああることではあるものの、これまた生々しい様相を呈して



【図版8】 筆者不明六半切の端の様相（実践女子大学蔵）

いる。

六 まとめと展望

以上述べきたったことを簡単にまとめ、近い将来への展望としておきたい。本稿の表題であるところの「本文研究と古筆切研究のあわい」とは、その両者にさほどの径庭がない、ということなのである。つまり、

(a) 古筆切研究はかつて存在した冊子本の復原作業であるとともに、

(b) それ自体がすでに本文資料なのだ、

ということを確認しておきたい。もとより、研究の立場で古筆切収集は、趣味的なものでは決してない、ということとはいうまでもない。

古筆切の示す本文は、現在のような活字本で統一された画一的な世界ではない。定家本が冷泉家を中心とした権威社会のなかで確立されてゆく過程とはまるで逆行するような、遡行するような作業ではあるが、抛るべき本文の吟味をせぬまま、特定の活字本にほとんど無批判に依拠しつつけている現状こそが問題なのだ、ということを反省する材料にはしないだろうか。その「特定の活字本」の底本は、大島本でなければならない理由を考えたことはないのだ

だろうか。

二〇〇八年のシンポジウムの際、加藤昌嘉は「なぜ、定家本にこだわるのだろうか？／かりに、定家書写の『源氏物語』が復元できたとしても、それは、あまたの鎌倉時代の写本の一つに過ぎないのではないだろうか？」という問いを発していた⁽¹⁸⁾。根本的な問題発言のはずではあるが、まともに応えた意見がその後にあったということを、寡聞ながら耳にしたことがない。特に、この加藤の問いの後段、定家本も「鎌倉時代の写本の一つ」というのは、古筆切の世界こそ実感させるアポリアなのである。鎌倉期と目される断簡の本文は、定家本本文そのものというるもの、伝寂蓮筆と同様に河内本に近接するもの、別本としかいいようのないもの、という具合に混沌といってもよい状況なのである。これらが同時に流通する世界におかれたとしたら、現在の研究者たちは何を発言するのだろうか。

日暮れて途遠しの感、いまその緒についたのみかも知れないというおそれを抱きつつ、あえて本稿の末尾に未完の文字を刻んでおく。

(未完)

注

(1) 阿部秋生の『源氏物語』本文に関する主な論考については、横井孝「源氏物語の本文と表現——『大成』以後」

と「阿部以後」の模索へ向けて」（横井・久下裕利編『源氏物語の新研究——本文と表現を考える』新典社、二〇〇八年二月刊、所収）に業績一覧を表示した。

(2) 阿部秋生「伝本状況について」（初出一九七二年、『源氏物語の本文』岩波書店、一九八六年六月刊、所収）、四四～四五頁

(3) 阿部秋生「矛盾する本文」（阿部編『源氏物語の研究』東京大学出版会、一九七四年二月刊、所収）、

(4) 阿部秋生「別本の本文」（初出一九八三年、前掲『源氏物語の本文』、一一三～一二四頁。

(5) 阿部秋生「本文を活性化すること」（『日本文学』一二二巻一〇号、一九七三年一〇月）、一頁。

(6) 横井孝「源氏物語の本文と表現——『大成』以後」と「阿部以後」の模索へ向けて」（前掲注（1）稿）。

(7) 横井孝「メッセージ」本文研究の近未来と集積の意味と」（国文学研究資料館『国文研ニュース』No. 四九、二〇一七年一〇月）。

(8) 野村精一「本文研究の近未来——系統論だけが本文研究ではない、といふこと」（『日本古典文学会会報』No. 一二二、一九九二年七月）。以下の野村の言は、同文による。

(9) かならずしも『源氏物語』に限定される話ではないが、その研究の基盤としての山岸文庫本を通して、おおまか

な見取り図を描いてみた。横井「山岸徳平博士の現写本考——実践女子大学図書館山岸文庫蔵本識語編年資料から」（『実践国文学』第九一号、二〇一七年三月）、「山岸徳平博士の物語研究一斑——実践女子大学図書館山岸文庫蔵本奥書識語編年資料から」（『実践国文学』第九二号、二〇一七年一〇月）などを参照されたい。また、「山岸徳平博士の『源氏物語』研究一斑——実践女子大学図書館山岸文庫所蔵本の識語調査から」（二〇一七年六月一日、中古文学会関西部会、於大阪府立大学）でもその一部を発表した。

(10) 工藤重矩「注釈書のために——源氏物語本文研究によせて」（『中古文学』第百号記念号、二〇一七年二月）。以下の工藤の言は、同論による。

(11) この間の事情については斯界周知の事実ではあるが、講演記録ながら、横井「源氏物語の一〇〇年——「下田講義」から「阿部以後」へ」（実践女子大学文芸資料研究所『年報』第二八号、二〇〇九年三月）にまとめている。

(12) 高田信敬「源氏物語の古筆切 二題」（紫式部学会編『源氏物語と源氏以前研究と資料』武蔵野書院、一九九四年一二月刊、所収）。

(13) 横井孝「源氏物語古筆切事始——筆者不明の断簡を読む」（『実践国文学』第九〇号、二〇一六年一〇月）、頁。

- (14) 田中登編『平成新修古筆資料集 第四集』（思文閣出版、二〇〇八年九月刊）六〇「寂蓮 六半切」。田中登『古筆切の国文学的研究』（風間書房、一九九七年九月刊）二九八頁にも掲載されている。
- (15) 『古典籍と古筆切——鶴見大学蔵貴重書展解説図録』（鶴見大学、一九九四年一〇月刊）。
- (16) 国文学研究資料館編『古筆への誘い』（三弥井書店、二〇一五年三月刊）、九八～九九頁。
- (17) 実践女子大学所蔵の古筆切にも、たとえば伝為家筆大四半切薄雲の巻のように、表裏揃ったもの、矧いだままで洗淨・表装の直前の姿のものがある。「実践女子大学所蔵 源氏物語古筆切目録稿（二）」（実践女子大学文芸資料研究所『年報』第三四号、二〇一五年三月）参照。
- (18) 加藤昌嘉「本文研究と大島本に対する15の疑問」（中古文学会関西西部会編『大島本源氏物語の再検討』和泉書院、二〇〇九年一〇月刊。のち『源氏物語前後左右』勉誠出版、二〇一四年六月刊、所収）。微差あるが、ここでは加藤著の二六二頁による。

（よこい たかし・実践女子大学教授）